書評

『よくわかる質的社会調査 技法編』
●谷　富夫・芦田徹郎 編
（ミネルヴァ書房, 2009年, B5判, vi＋224頁, 2,625円）

『よくわかる質的社会調査 プロセス編』
●谷　富夫・山本　努 編
（ミネルヴァ書房, 2010年, B5判, vi＋235頁, 2,625円）

●間淵　領吾
（関西大学社会学部教授）

評者の記憶が正しければ，社会調査士制度の草創期には，質的社会調査に携わる人々から「質的社会調査は定型的な教育が難しい」という意見があった。質的社会調査における定型化は量的社会調査とは異なるのかもしれないが，定型化は可能なはずだし，教育するからには定型化すべきでもあるに違いないのに，質的社会調査とは不思議なものなのだなぁ，と思った記憶がある。

編者の１人である山本は，『よくわかる質的社会調査 プロセス編』（以下，『プロセス編』と表記）の「あとがきに代えて――質的調査の意味と学び方をめぐって」で，質的調査は量的調査を実施する土台にもなること，質的調査のセンスは量的調査でも活かされることを述べた後，次のように述べている。

> 質的調査のすぐれた作品を多く読んで質的調査の面白さ，質的調査ならではの切れ味を知ることはとても重要です。実際，多くの人はこのようにして質的調査を勉強してきました。しかしながら，このような「作品から学ぶ」という学び方では，それらの作品をどうやって作ったかというプロセス（舞台裏，仕事の仕方）はわからないということになります。

『プロセス編』は，日本人社会学者による日本社会についての調査体験に基づき，まさにこのプロセスを示すことを目的に編まれた初めての教科書であるとのことである。『プロセス編』で示されたプロセス（舞台裏，仕事の仕方）は，個々の質的社会調査による作品が産み出された過程だが，それらを定型化した面もある。編者らの努力によってこのような教科書が出版されたことは，実に喜ばしい。本書に刺激を受けて，質的社会調査のプロセスを定型化することについて議論が盛り上がることを期待したい。

『よくわかる質的社会調査 技法編』（以下，『技法編』と表記）は，第１部「社会調査法概説」（社会調査の意義と目的，質的社会調査の考え方），第２部「調査技法――質的データの収集」（フィールドワーク，参与観察法，ワークショップ，インタビュー），第３部「分析技法――質的データの分析」（ライフヒストリー分析，会話分析，内容分析，質的データのコンピュータ・コーディング，質的データ解析支援の方法論），第４部「質的調査の現場」（調査の企画，データ素材の収集，データの作成，論文執筆，質的調査の応用，質的調査と調査倫理）という構成となっている。

『プロセス編』は，第１部「質的社会調査概説」（質的社会調査の方法と意義，古典の紹介，社会調査のタイポロジー），第２部「問いをたて，技法を選ぶ」（「良い問い」の作り方，先行研究の調べ方，調査技法の選び方など），第３部「現地に入り，記録する」（フィールドへの入り方，調査対象者とのコンタクトの取り方，インタビューの仕方，フィールドノートの書き方，インタビュー記録の仕方，静止画像・動画の撮り方など），第４部「データを処理して，報告書を作成する」（インタビュー記録や映像資料の利用方法，報告書の書き方，調査倫理の重要性とジレンマなど）という構成となっている。

『技法編』と『プロセス編』は，社会調査士標準カリキュラムＦに対応しており，専門社会調査士標準カリキュラムＪでも活用可能であり，『プロセス編』は，Ｇにも対応しているとのことである。両著とも量的社会調査について学ぼうとする者にも参考となる点が多い。

『技法編』の編者の１人である芦田による「あとがきに代えて――星の王子さまとアンケート」は，質的・量的を問わず，社会調査に関わる全ての者が読むべき一文である。